

「研究テーマ」

新聞を活用した「自らの生き方を考える力」の育成

～NIEの活動と「読書の学校づくり」～

兵庫県播磨高等学校 校長 摺河 祐彦

教諭 西村 彰範

## 1 はじめに

兵庫県播磨高等学校は、姫路市の中心部 JR 姫路駅の南 200m に位置し、JR の駅からのアクセスでは県下で 1、2 を競う近さである。そのため通学区域は、東は明石から西は赤穂まで、北は小野市や宍粟市に南は家島からと、まさに名は体を表すがごとく、校名のままに播磨一円に広がっている。

その広範な地域の要求に応えるべく創立以来 94 年にわたって有能な女子の育成に携わっている伝統校であり、6 年後の創立百周年の佳節に向けて学校では、「百周年構想委員会」が設置され、すでにさまざまな取り組みが行われているところである。

## 2 「読書の学校づくり」

その一環として「読書の学校づくり」が掲げられ、3 年前から全校挙げて朝の SHR を利用して 10 分間の「朝の読書」を実践している。さらに委員会では、本校独自の推薦図書 100 冊を選定し、「播磨の百冊」として紹介している。

また本校の部活動には、他校にもあるような創作活動を中心とした文芸部のほかに、図書部という、生徒会の図書委員会から独立した部活動がある。その上本校には、読書会を中心に作品を鑑賞したり意見を交換したりする読書部がある。このように「本」に関係した部活動が 3 つもある学校は全国的にも珍しいのではないかと。

これらの 3 つの部が毎年秋の文化祭であ

る「学芸発表会」においてはこれまで、それぞれが別に活動の状況や成果を発表してきた。その中でも図書部は、本校推薦図書である「播磨の百冊」をすべてそろえて、その中の数冊について、「ポップ」と呼ばれる簡単なその本の紹介を添えて展示していた。

こうした生徒の自主的な取り組みは、学校サイドからのトップダウンになりがちにだけに大変ありがたかったが、年に一度数冊の紹介では、この先、膨大な時間と労力を要する割には、せっかくの取り組みも実を結ばない。何とかして生徒をサポートする手立てはないものかと思案していたところであった。

## 3 NIE 活動と「読書の学校づくり」

そんな折しも、本校が平成 25 年度の NIE 実践校として指定をいただいたわけだが、NIE の活動はすでに県内でも小・中・高を合わせると、大多数の学校が実践に取り組んだ実績があるのが現状である。

本校でも現に、新聞のコラムを授業に活用しての実践は国語科や社会科でも取り組んでいるが、これまで他校で行われた同様の実践と特に変わり映えのするものではない。そのため、他校の実践報告を調べれば調べるほど、ほぼ出尽くした感さえある。そんな中で本校が取り組むにあたって、いかにして本校独自の実践をするかは、当初の課題でもあった。

従って、図書部の取り組みは、本校百周

年に向けての「読書の学校づくり」という本校独自の活動に、NIEを活用する意味で、格好のヒントを与えてくれることになったわけである。

いかにして取り組むか。既存の新聞をそのまま使う活動ではなく、本校推薦図書「播磨の百冊」を全校生に紹介し、読んでみようというきっかけを与える「媒体としての新聞づくり」に取りかかることにしたのである。生徒が取り組んできた「ポップ」は、言わば書評である。

どの新聞にも、定期的に紙面を割いて書評欄を設けているし、日々欄外には書籍の宣伝が必ず掲載してある。これまで生徒は、それぞれの本の帯や裏表紙に書かれている紹介文を短縮してポップを作成するのが常套手段だったようだが、今回あらためて新聞の書評欄や広告欄を、そのつもりで意図を持って、目を通すようにすると、また新鮮な刺激を受けることになった。

その感性で「播磨の百冊」の書評について取り組んでみてはどうかということになった。そうすると、図書部だけではかなりの負担となる。そこで、せっかく本校には全国的にも珍しい、書物に関係する3つの部活動があるのだから、この際、3部が共同で取り組めば心強いに違いないということで、総勢30人に及ぶ部員で取りかかることになった。

#### 4 記者派遣事業

こうしていよいよ動き始めることになるわけであるが、いざ書評を書くとなると、思うようにはいかないものである。そこで「NIE巡回セミナー」の記者派遣事業を実施するにあたって、講師である毎日新聞の島津忠彦姫路支局長のお知恵をお借りすべく事前に打ち

合わせをさせていただいた。

支局長からは、「新聞の書評は専門家が書いているので、今回の話としてはふさわしくないだろう。それより生徒が書いた書評をレイアウトして、図書新聞を作成するお手伝いならできる」とのことであった。確かに、こちらとしても、その方が生徒の活動が前面に出せるし、何より生徒たちはすでにポップという形で取り組んでいる。



こうして3学期に入って、支局長をお招きしての「NIE巡回セミナー」を開催する運びとなった。当日は、講義に続いてワークショップも行ったが、熱く語られる支局長に応えるように生徒たちも熱心に聞き入り、予定を大幅にオーバーして終わった。

早速、翌日から3つの部の部員を4、5人の班に分け、アドバイスを参考に「播磨の百冊」を紹介する新聞作成に取りかかった。タイトルはシンプルに「播磨の百冊」を省略した「はりひゃく」とした以外は、ほとんど生徒たちに任せた。

最初は、生徒がこれまで読んだことのある作品を選ぶことにして4、5冊程度を取り上げ、「ポップ」は必ず入れた上で、さらにカットはカラーも可とした。取り掛かりは、なじみのないメンバーの集まりだけに、ぎこちなさそうにしていたが、すぐに打ち解けて相談しながらレイアウトにも工夫を凝らして熱心

に制作に打ち込んでいた。

## 5 図書新聞「はりひゃく」の取り組み

こうして創刊号から第4号まで、20冊分を紹介する「はりひゃく」が一通り完成した。ただし、現時点ではまだ原案の段階であって、これから細部にわたって手直しをしたりしながら、新年度早々には全校生分を印刷して配布する予定である。その際「播磨の百冊」も併せて全校生分を配布する。そして原版はカラー制作として図書室に展示する。

「はりひゃく」は月2、3回の発行とし、1号につき5冊を紹介することにして、今秋の学芸発表会までに、何とか百冊すべて紹介し終わられればと計画している。そうすれば、生徒たちの活動の証しとして、1冊の冊子に製本し、学芸発表会で展示することができる。

また、この「はりひゃく」の活動が定着すれば、新たな取り組みを刺激することにもつながる。というのも、本校では「読書の学校づくり」の一環として、新年度から「読書カード」を全校生に持たせることにしている。

これは図書館で貸し出す際に利用している従来の「貸し出しカード」を発展させたもので、B6判のカードに朝の読書等で1冊読むごとにその本の内容を、定期的に発行される「はりひゃく」を参考にポップにして書き込んでいくようにする。本人にとっては高校生活3年間の読書の記録ともなるものであり、果たして何枚書く生徒が出てくるか、こちらとしても楽しみにしている。

「はりひゃく」は百冊をもって完結する

わけだが、こちらの方は現在、生徒たちに読まれている本が対象になるわけで、その中から生徒に人気の高い本のポップを選んで紹介する「図書新聞」を発行していきたいと考えている。

こうして、学校が推薦する「播磨の百冊」と、「読書カード」の取り組みの中から生徒たちが選んだ本が、「朝の読書」の時間をはじめ、主体的に読まれるようになれば、「読書の学校づくり」にとって大きな前進となるに違いない。



## 6 その他の実践

上記の取り組みは、本校のメインとなる実践活動であり、2年目となる来年度に引き継がれていくが、同時に今回のNIEとして、すでに新聞活用の定番となっている取り組みも各教科で実践されている。

今回、指定校となることで無償提供していただいている各新聞は、図書室前の廊下に「NIEコーナー」として設置し、2社の新聞を1週間分ストックし、常時読めるようにした。

ただ、年間通年となると2社分となるため、読もうと思ってやって来ても、先客がいればおのずと見送るようになり、一度に多くの生徒が集まる状況にはならないが、昼休みを中心に新聞に目を通して生徒

が途絶えない状況となっている。



また、国語科では、医療看護系進学コースの生徒全員に週2回、こちらで選んだコラムを書き写し、さらに本文を百字程度にまとめる課題を授業の中に取り入れている。さらに社会科や家庭科等でも、設置している新聞の中から生徒に記事を調べさせて授業に活用している。

こうした新聞の活用方法は、今に始まったことではないが、近年、この取り組みの共通の悩みは、すべての生徒の家庭で新聞を購入しているとは限らなくなっている現状があり、宿題として個々に新聞の切り抜き等を課すことができなくなっていることである。

学校においても予算削減で4、5社分の新聞を年間購入する学校は少なくなっている。そのため、NIE指定校期間中の新聞提供は大変ありがたく、有効に活用させていただいている。

## 7 おわりに

この指定期間は2年間ということで、来年度が仕上げの年となる。先に述べた本校独自のメインとなる「図書新聞」の取り組みは、これから生徒の活動をいかに活性化させるかにかかっている。そのためには、年度当初に新入部員を勧誘することも大切

である。先輩部員たちには、この意義を熱く語ってもらい、一人でも多くの部員を確保してもらいたいものである。

学校の伝統というものは、学校側が主導して作られるというより、主体者である生徒の、先輩後輩の関係の中でこそ引き継がれていくものだと思うからである。